

ケルン大学における二つの方向性

嶋 田 由 紀

筆者は、現在、ケルン大学で交換留学生としてドイツ文学科に籍をおきながら、研究している。ケルン大学は、ドイツの大学の中でもマンモス校のうちに入り、ドイツ文学科一つをとっても、ゼミナールの数とテーマは多彩をきわめている。このような状況で、一言でその特徴を述べるのは容易ではないが、ここでは、筆者がいくつかのゼミナールに参加するなかでみいだした、ケルン大学における二つの方向性について紹介したい。

筆者のドイツにおける指導教授、ヴィルヘルム・フォスカンプ (Wilhelm Voßkamp)¹⁾氏は、「メディアと文化のコミュニケーション」というタイトルのもと、1998年に Kulturwissenschaft 研究所²⁾を開いた人物である。彼のテーマは、「メディア競合 (Medienkonkurrenz)」であり、その核となっているのは、エンブレム³⁾。図と文字という二つのメディアの関係が、時代時代のコンテクストによってどう変化するかという、非常に興味深いテーマである。このテーマは、研究所に名を連ねるケルン大学の講師間にも浸透しており、ドイツ文学科のカリキュラムにも組み込まれ、学科全体に一貫した方向性を与えている。

まず、文学史講義では、各時代の主な文学作品を紹介しながら、受容理論からメディア論にいたるまでの文学理論が平行して教え込まれる。そして、1ゼメスター以上の学生が参加するプロ・ゼミナールでは、メディア競合がどのように文学テキストのなかに現れているかに注目し、テキストを読みながら、既習の方法論を活用する術が発表を通して学ばれる。その際、文学研究に必要な基礎知識が徹底的にたたき込まれる。進級テスト (Zwischenprüfung) に合格した学生が参加するハウプト・ゼミナールは、発表中心の授業形態となり、担当者が30分ほど発表し、あとは議論となる。発表や議論の仕方には程度のばらつきがあるものの、それまでに文学知識の基礎ができあがっているため、メディア競合については白熱した議論が交わされている。

だが、メディアといったとき、授業で扱われる範疇は、視覚的メディア——絵画・カメラ・映画など——にとどまっており、聴覚メディアや触覚・味覚などの他の感覚にまでその視野が広がられていない。あたかも、——啓蒙主義的言説に従えば——理性へと通じる器官、視覚、を通してしか、メディアの理解に到達できないかのようである。このよう

1) 彼の研究については、<http://www.uni-koeln.de/phil-fak/idsl/dozenten/vosskamp.html> 参照。

2) 正式名は、Kulturwissenschaftliches Forschungskolleg。
<http://www.uni-koeln.de/inter-fak/fk-427/> 参照。

3) 中世から存在するエンブレムは、中央に描かれた図 (pictura) と、その下か上に置かれた、図を説明する短文 (scriptio) から成り立っている。

な視覚中心主義は、精神至上主義へと通じ、身体やそれ以外の感覚を排除する危険性を孕んでいる。メディアを研究の対象とするならば、メディアがシステム内にとりこまれるとき、それに適応しきれない〈他者〉が残余として生じざるをえないという事実にも、やはり着目すべきであろう。だが、この〈他者性〉は、「メディア競合」という名のもと、もう一つのメディアを導入したとき、〈他者〉という矛盾を補足するという形で、隠蔽されてしまう。このような弁証法的解決法は、「競合」といいながらも、メディアに順応することができたもののみを主体とし、メディアから生じた〈他者〉を排除することで、その主体をさらに確固としたものにするための「協合」に変換されてしまっている。

この傾向は、博士課程以上の学生や研究者で構成されるコロキウムにもみられる。フォスカンプ氏のもとに集まる学生は、その約半数が外国人で、現在コロキウムに参加している人数は20人ほどである。毎回、担当者は自分の博士論文のテーマについて、30分ほどプレゼンテーションを行い、その後一時間半にわたってそれについての議論が交わされる。前もって渡された10ページ程度の論文構想の要約を読んでいくことが参加者全員の義務とされているので、議論の内容はテーマの扱い方から方法論にいたるまでの有意義なものとなる。他の、大規模なコロキウムになると、一度に数人の発表者が10分程度の持ち時間で発表し、それについてのコメントはほとんどもらうことができない、という現状を考えると、この環境は恵まれている、といえる。コロキウムで行われる発表と議論は、一般的にレベルが高く、文学的シェーマやジャルゴンは研究者として当然知っているべきものという前提で行われる。したがって、それらのものをおさえず、いい加減な知識で参加しようものなら、集中砲火を浴びることになる。

しかし、このような文学理論の定義はドイツにおける「ドイツ文学」内で醸成されたものであり、修士の段階までにそれを研究者の教養としておさえてきたのであれば、その自明性を疑う視点が博士課程で要求されてしかるべきである。というのも、解釈と応用の仕方は、それぞれ独自の文化的コンテクストによって、あるいは、個人の所有している問題性によって、差異が生じてくるのは当然であるからだ。議論の大体は、この差異をめぐる再定義へと向かう嫌いがあるが、そのような場合にはフォスカンプ氏の配慮があり、自国ではどうなっているかとの質問が、ドイツ出身以外の学生に向けられる。しかし、ゼミナール全体の関心が「ドイツ文学」というディスチプリーン確立、すなわち、主体確立にあるせいか、せっかくの問いかけに答えても、異文化紹介に終わらざるを得ず、議論が異文化理解、つまり他者理解にまで到達しないのは、はなはだ残念である。

ケルン大学におけるドイツ文学科が主体を確立するための〈精神〉の牙城であるとすれば、日本学科⁴⁾はそこから排除された〈身体性〉を考察する場となっている。例えば、2003年に行われた稲垣正浩氏のプロ・ゼミナール⁵⁾では、ハイデガーやバタイユのいう〈エクス

4) ケルン大学日本学科については、<http://www.uni-koeln.de/phil-fak/ostas/japan/>参照。

5) 稲垣正浩氏は、現在、日本体育大学で教鞭をとっているが、2003年夏学期間は、DAADの招

ターゼ》を援用しながら、「わたしがわたしでなくなる瞬間、わたしの身体がもはやわたしのものでなくなる」とについての考察がおこなわれた。稲垣氏は、東西のスポーツ史を例に取りながら、このような〈エクスターゼ〉の瞬間を排除してきた近代のあり方が孕む問題性を指摘し、近代によって排除されてきた〈身体性〉を照射することが〈他者〉理解につながることを論じた。「わたし」の自明性を疑うことなく、身体が主体の管理下にあることを当然としてきた学生は、稲垣氏の「開かれた身体をもつことが、すなわち他者理解である」というテーゼに戸惑い、理解するのに時間を要したが、回を重ねるごとに自分の体験に照らし合わせて、〈他者〉に向かう「開かれた身体」とは何であるかの答えを自分なりに出していった。ゼミでは、発言の仕方こそ拙いものの、刺激的な意見が飛び交い、議論はゼミ時間終了後も続くこと、度々であった。

また、アンドレアス・ニーハウス⁶⁾氏の担当する、日本文化史入門と銘打つ 2003/04 年冬学期のプロ・ゼミナールでは、身体文化とスポーツがテーマとなっている。グループ発表者に割り振られた課題をのぞいてみると、「宮廷におけるゲームとスポーツ」、「従軍慰安婦問題」、「いじめ問題」、「各々の時代におけるセクシュアリティと売春婦」、「大戦中における身体」など、興味深い項目がならんでいる。いわゆる「外国人からみた典型的日本文化」についてではなく、批判的視点から日本文化を眺め、文化という網の目に支配される身体を考察対象としているのは、おもしろい。

惜しむらくは、なぜドイツにおいて日本学を学ぶのかという問いかけがなされていないことである。つまり、個人のもつ関心や問題がその個人のおかれている環境から生じてくるものだとすれば、この環境をも視野に入れるべきであろう。なぜ、ドイツにおいて日本文化が今注目されているのか、なぜドイツにおいて〈身体性〉について考察させるをえないのか、ということが議論されないかぎり、ドイツ現代社会が孕む問題性が浮き彫りにされないからである。

以上、ケルン大学の二つの方向性を示す例として、ドイツ文学科と日本学科におけるいくつかのゼミナールを紹介したが、一方は主体確立へ、他方は他者理解へとまったく逆のベクトルをもちながらも、両者とも〈主体〉のあり方そのものへの問いかけがなされていない点において共通している。これは、「ドイツ」という文化を理解しようとするとき、一つの糸口になるのかもしれない。

待講師としてケルン・スポーツ大学で講義を行なった。ゼミは、ケルン大学日本語学科とスポーツ大学との合同授業となり、いきおい、日本人学生をはじめ、分野を超えたさまざまな学生が集まることとなった。参加者の中には、ドイツ語に不慣れなものもいたため、日本語→ドイツ語、英語→日本語間の翻訳が必要となった。それ故、それぞれの言語に通じたものが、他の言語に翻訳するという授業形態になった。これは、日本語学科の学生にとっては日本語の、日本人学生にとってはドイツ語の語学力向上の効果をもたらしたことは、いうまでもない。

6) Andreas Niehaus 氏の博士論文は、「嘉納治五郎の人生と仕事」についてである。